慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	移動とアイデンティティ生成 : 日系二世の生活と地域
Sub Title	
Author	柳田, 利夫(Yanagida, Toshio)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2010
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.15 (2010. 7) ,p.43- 52
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集1: 地域研究とオーラルヒストリー
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20100700-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

移動とアイデンティティ生成

日系二世の生活と地域

柳田　利夫

１．はじめに

本報告では、日本で 20 年近く生活を続けてきた一人の日系ペルー人二世についてその生活の軌跡を取り上げる。彼の母国ペルー国内での生活と移動、日本への出稼ぎ、そして最終的に日本での永住を決意しゆくに至る具体的なプロセスを、歴史学的な手法に依拠しつつ文献史料と聴き取りとにより再構成する作業を通じて、彼の生活戦略とそこで動員されてくる「地域」とのかかわりを関心の中心に据えて、人が移動することにともなうアイデンティティ生成のプロセスについて考えてみたいと思う。

伊豆の韮山にほど近い村からペルーへの集団契約移民として明治末年に単身渡航し、結果的にその地に骨を埋めることになった浜村弥太郎という名の人物を祖とする、二世から四世にわたる三世代の日系ペルー人家族都合 11 人が、現在日本でほぼ定着して生活を続けている。その中から二世のフランシスコ・ハマムラについての事例を主に扱わせていただくことにする[1)]。このハマムラ・ファミリーは、いわゆるラテンアメリカからの出稼ぎ日系人一家であるが、構成員の来日時期にタイムラグがあり、呼び寄せ移住のプロセスが見られること、また、家族全員が日本へ渡航するまでの間にペルーにおける家産を事実上処分していること、そしてそのことと表裏一体の関係になるが、20 年にわたる日本での滞在期間を通じて、家族のだれも一時帰国をしていないということをまずその特徴としてあげることができる。ラテンアメリカからの出稼ぎ移住者、就中ブラジルからの日系移住者などによく見られるように、本国と日本との間を何度も行き来するような行動とはこの家族はほとんど無縁であると言える。無論、結果的に日本での定住を受け容れてゆくまでには、家族の構成員それぞれの位置によって長短の差はあるものの、相応の時間が必要であったが、少なくともかなり早い時期に、比較的長期的な日本滞在を前提に家族の生活設計を打ち立てていたと考えられる。

ここでは、1922（大正 11）年にペルーで生まれ、現在は北関東の地方都市で、日系四世である孫たちの成長を見守りながら事実上の隠退生活に入っているフランシスコ・ハマムラという二世に焦点を絞って報告することになるが、後の議論に必要な範囲で、まずフランシスコの両親である移民一世の生活と移動、アイデンティティ生成についてごく簡単に見てゆくことから始めることにしたい。

２．一世の生活戦略

1885（明治 18）年、伊豆半島の付け根部分にあたる静岡県田方郡江間村（現伊豆の国市）で生まれた浜村弥太郎が、のちにブラジルへの第一回移民送出船として後世に名を残すことになる笠戸丸で第四回集団契約移民の一人として単身ペルーに渡航したのは 1907（明治 40）年のことである（外務省外交史料館 3.8.2.38、日本人ペルー移民史料館「移民名簿」）[2)]。彼は、当時日本人移民が最も集中していた英国製糖会社経営にかかる太平洋に臨むカニエテ耕地に入り、砂糖黍畑で二年間の契約で労働に就いている。史料的にその正確な時期を確認することはできないが、他のペルーにおける日本人移住者の例に漏れず、弥太郎も都市部での高賃金を求めてほどなく契約耕地を離れ、首都リマ郊外の港町カリャオへと移り理髪業を始める。やがて理髪業の傍ら始めた薬種販売をきっかけに日用雑貨店商として小さな成功を収めるようになり、店の経営が安定すると弟の彦一をペルーに呼び寄せ店を任せ、弥太郎自身は 1917（大正 6）年日本へ一時帰国し日本で数年を過ごしている。その後、1921（大正 10）年に日本で結婚した妻のアサを伴い再びカリャオの店に戻り、翌 1922（大正 11）年 10 月にはここでの報告の中心となる長男のフランシスコ（知雄）がカリャオで生まれている。その後、長女千代子、次女敏子の三人の子供を得ているが、この頃はまたカリャオにおける弥太郎の商売の絶頂期でもあり、1924（大正 13）年からしばらく、弥太郎はカリャオの日本人実業者の中でもトップクラスを維持していたことが記録されている（外務省 1925,1927,1929,1932）[3)]。

弥太郎がペルーに戻ると、弟彦一は健康上の理由もあったようであるが、海岸の都市リマからアンデス山脈を越えた中央高原地帯へと行商に出るようになり、1931（昭和 6）年にはアンデス高原の中心的な町であるワンカヨに衣料品店の店を構えるまでに成功していった（外務省 1932）。1933（昭和 8）年には彦一の後を追うように弥太郎の一家五人もまた、生活の基盤をカリャオからワンカヨに移し、高原の町で日用雑貨店を営むようになっていた。この移動の具体的な背景や理由は不明であるが、まず弥太郎が単身でカリャオを離れ、半年ほどかけてしかるべき準備を整えた上で、家族もワンカヨの町に移っている。

もっとも、日米関係の悪化と日本人移民の社会的上昇を背景に、ペルー国内で次第に排日運動が高まり、日本人移民の営業に対する種々の制限令が出されるなかで、ワンカヨにおける弥太郎の商売はカリャオ時代のようには順調に運ばなかったようである（外務省 1937,1938,1940）[4)]。彦一の店もまた、彼が 1939（昭和 14）年末から半年ほど日本に一時帰国している間に、商売敵の策略により多大の負債を重ねる結果となり、二世のフランシスコまでが、中学校を中退して父と叔父の店の手伝いに奔走することになった（濱村 1995：5-14）。

1940（昭和 15）年 5 月には、労働運動と学生運動の高まりを背景に、首都リマで日本人商店に対する掠奪暴動事件が勃発しているが、その余波は高原の町にまで飛び火し、日本人の商店もペルー一般大衆の掠奪による被害を受けている（「暴動被害申告書」）。ごく小規模の弥太郎の店や、経営不振に陥っていた彦一の店は直接の被害を受けることはなかったが、その翌年、日米開戦間近の 8 月に、弥太郎は意に任せないままワンカヨの町で心臓麻痺のため急逝してし

まうのである。

ここで、本報告にかかわる範囲で、一世の弥太郎に見られるペルーでの生活戦略についてふり返ってみよう。彼が契約耕地における労働者としての生活に見切りをつけ、短期間でより高い収入を得る可能性のある都市部カリャオへと移動していったのは、当時のペルーにおける日本人移民としては極めて典型的な行動パターンであったと言える。彼が最初に始めた理髪業もまた、資本を持たない日本人がまず手始めに選択する代表的な職業であり[5)]、当時ペルーでは、床屋（peluquero）という言葉はほとんど日本人の代名詞となっていた程であった。その後、彼は日用雑貨店の経営にシフトすることに成功し、カリャオの日本人の中では一、二を争う成功者になっていったのであるが、そのプロセスで、ペルー渡航時にはほとんど周囲に頼るべき人的なネットワークを持たなかった弥太郎の経営を支えたのは、静岡県出身者による頼母子講を中心とする私的な金融組織であったという。病気や不慮の災難など非常時における生活上の相互補助と、経営資金面での相互融通の機能を併せ持つ組織として立ちあがってきた静岡県人のネットワークは、彼自身は無論のこと、その後、彼の子孫たちの社会生活にも大きな意味を持つようになってゆく。史料的に裏付けることはできないが、祖国を離れる時点ではおそらく直接的な関係を持たなかった県人たちが、移民船での共同生活や契約耕地での労働者としての生活を通じ、あるいは都市での生活を築きあげてゆくなかで、「静岡県人」としての人的ネットワークを形成していったものと考えられる。

一方、ペルー生まれの二世たちは、カリャオ在住邦人の手により 1926（大正 15）年に設立されたカリャオ日本人小学校に入学し、日本式の初等教育を受けている。もっとも、日本人学校を一歩出れば、子供たちを取り囲んでいるのはペルーの下町の世界であり、自分たちの店の顧客もまたペルー大衆層であった。弥太郎はワンカヨに移ってからも、子供たちをワンカヨ日本人小学校に入学させ、出来る限り日本式の教育を受けさせることに努めている。子供たちが、日常生活ではペルー社会の中で成長していっている事実を受け容れながらも、二世の子供たちに日本人としての初等教育を受けさせることに拘泥していたのである。これは言うまでもなく、一義的には帰国を前提とした弥太郎の生活戦略とアイデンティティにかかわる問題であったが、結果的に後に述べるように、二世のフランシスコにとってアイデンティティの揺らぎの原因となると同時に、その後の彼の人生において具体的な生活戦略上の貴重な社会的・文化的資源を担保することにもなるのである。

また、リマやカリャオと比較すれば、高原地域の中心都市とはいえワンカヨはかなり小さな街であった（櫻井 1935：2-3,398-401）[6)]。このため、相互扶助がそれなりの実効性を持つためには、在住邦人全体が一つにまとまってゆく必要があった。ここに、ワンカヨという居住地を軸に、県人を越えた日本人全体の相互補助組織であるワンカヨ日本人会を中心とする人的ネットワークが形成されてゆくことになるのである（櫻井 1940：78-82、「有富八郎文書」）。

一世の浜村弥太郎の生活戦略を見てくると、移動のプロセスを通じて、個々の具体的な状況に応じて、静岡県（人）、同航海（者）、同耕地（就労者）、日本（人）、ワンカヨ（居住者）と

いった様々な「スケール」で形成された組織・人的ネットワークとの関係性を構築していることが分かる。それはまた、後に二世の生活戦略の社会的・文化的資源ともなってゆくものであった。

３．二世の生活戦略

次に、弥太郎の長男フランシスコを中心に、二世の生活戦略について見てゆくことにしたい。日米開戦直前に父を失ったフランシスコは、開戦直後には日本人会の中枢部を占めていた叔父の彦一が北米に強制送還されその資産が凍結されるという厳しい現実に直面することになる。幸いに、領事館への出生届け出により日本国籍を得ていたと同時に、ペルー国内での出生により自動的にペルー国籍を付与されていたフランシスコは、戦時中の敵性資産凍結令の適用を免れることができたため、彼の手許に残された父と叔父の資産を元手に、戦後同じ静岡県人の石井庄次と共同で衣料品の店を開く。1950（昭和 25）年には、ワンカヨ生まれの日系二世アリシアと結婚し着々と生活を築いてゆくとともに、戦後もペルーへの帰国が許されず北米に留まっていた彦一に対し、商売で得た利益を送金してもいた（濱村：110,138,142,216-217）。

一方、戦後の首都リマの急速な拡大と、就業・教育などあらゆる機会のリマ一極集中が進行し、地方からリマをめざす人の動きが激しさを日に日に増していった。既に三人の娘を持っていたフランシスコ夫婦もまた、1964（昭和 39）年、地方からの人口流入により混沌とした巨大都市と化しつつあったリマの街へと移動してゆくことを決意する。それはまた、高度成長期の日本から、日系企業のラテンアメリカ進出が加速していた時期でもあった。

リマに移ったフランシスコは、邦字新聞の求人広告をきっかけに得た日系二世が経営するラルコ写真館での勤務を皮切りに、1969（昭和 44）年には設立されたばかりの日秘商工会議所に、そして 1974（昭和 49）年からは輸入商ラティメラ商会と、徐々に社会的上昇を遂げつつ、リマの町の中でホワイトカラーとしての生活を続けていった。

60 歳も近くなったフランシスコがおそらく最後の仕事となるであろうと選んだのが、カリャオで外国人が経営する漁船会社において日本からやってくる日本人船員たち相手の通訳の仕事であった。ブラジルに若干遅れながらも、ペルーからも日本出稼ぎが始まろうとしていた 1988（昭和 63）年のことであった。ほどなく 1989（平成元）年に日本に出稼ぎに出ていたカリャオ、ワンカヨ時代を通じての親友エルネスト・タキザワ（フランシスコと同じように日本国籍を持つ静岡県人二世）が、日本への定住を決意し、家産を整理して家族全員を日本へ呼び寄せる目的で一時帰国してきた（柳田 1999 : 88-89）。彼は、フランシスコに日本での生活を語り、ペルー人の出稼ぎ労働者のための通訳が必要であること、ペルーとは比較にならない高給を得ることができることなどを告げ、日本への出稼ぎを熱心に勧めた。こうしてフランシスコも 1990（平成 2）年 9 月、日本への出稼ぎを決意したのである。既に三人の子供たちもそれぞれ独立しており、自分たちの老後に備えて資金を貯えること、父母の祖国日本を一度は経験してみたかったことなどなどが主な動機であったという。

ワンカヨ時代のフランシスコは、衣料品店を経営しながら、一義的にはペルー人として、ペルー社会の中で生きてゆくことを決意していたと言える。彼ら日系二世は、30 年代後半の排日運動の激化や掠奪暴動事件、そして日本の敗戦による喪失感などによって萎縮しがちであった一世たちとは異なり、日系人に対する差別的な眼差しの残るなかで、ペルー市民としての社会的認知と権利とを強く主張（増田：276-284）するために「ワンカヨ二世協会」を設立した。フランシスコもまた、その立ちあげ人の一人として積極的にその活動に参加していった。二世たちは、地方の有力者との社交にも心を配り、ワンカヨの一般市民に向けた演芸会、舞踏会などの催し物、郡のフットボールリーグへの加盟、地域消防団への参加などなど、日本人の血を引くペルー市民＝Nisei（いわゆる「二世」よりも「日系」というニュアンスに近い）として生活してゆく方向で自らのアイデンティティを多分に戦略的に生成していったのである（増田：259-260、柳田 1997：168-172）。一世から受け継いだ様々な社会的・文化的資源は、ペルー市民という前提の限りで積極的に動員されていった。こうして二世たちは、ワンカヨの薄い中流階層を形成する市民として自己主張を重ねながら、積極的にペルー社会での人脈形成に努めていった。

しかし、ほどなくこういった社会的上昇志向の強い青年たちの少なからざる部分が、高等教育やより良い職を求めて首都リマに向かってワンカヨの町を離れていった。その流れの中で、フランシスコも父の残した僅かな資産で営んでいた店を手放し、遅ればせながらも、就業機会と子弟教育のためにリマに移動する決意をすることになった。リマの町に出ていったフランシスコにとって、そこでの生活戦略上極めて重要な文化資源となったのは、ワンカヨでの生活ではほとんど動員する機会のなかった、日本語の読み書き能力であった。

高度成長を背景に日本企業がラテンアメリカに進出し、日本製品が高い評価を得てゆくなかで、彼が最初に働くことになったのは日系二世が経営する写真館であったが、そこでの彼の仕事は専ら日本製のカメラの輸入販売であった。ついで彼が職を得たのも、日本企業のペルー進出にともない創設された日秘商工会議所であり、そこでの日常業務もまた、進出企業の日本人とペルー側との仲介にかかわる翻訳や通訳の仕事だった。その後、15 年にわたり勤務したラティメラ商会は、ワンカヨ時代に知遇を得た日系社会の成功者市川善村が経営する会社であった（市川 1998：37-47）。そこでもまた、彼は日本製品の輸入販売事務を任されることになったのである。

60 年代末から 70 年代にかけて、日米開戦以降専らペルーの公教育を受けて成長してきたフランシスコより若い世代の二世たちが大学での教育を終え、ペルー社会で活躍を始めていた。ワンカヨ時代のフランシスコ同様、専らペルーでの社会的上昇を志向する彼らにとって、日本語はほとんど有効な文化資源として見做すことはできず、結果的に彼らの大部分は家庭内におけるごく簡単な日常会話程度はこなせても、読み書きや仕事の現場における通訳などの需要に応えることはできなかった。急速に高度成長を遂げ、ラテンアメリカにまで経済的な進出を遂げてきた日本の存在を背景に、戦前日本人学校で教育を受けたフランシスコたちの日本語能力

は、生活戦略上貴重な文化資源としてリマの町で浮上して来ることになったのである。

リマに出てきたフランシスコは、このように日本語能力やワンカヨ時代に築きあげた人脈、そしてリマ・カリャオの町で再結成された静岡県人会の人脈を最大限利用した生活戦略を駆使していたと言えるだろう。ワンカヨ出身の日系人たちはリマの町で「アンデスクラブ」を組織し、相互扶助を重ねつつ、自らのアイデンティティ生成を重ねていった。ワンカヨ時代とは異なり、フランシスコはリマの町では「ペルー人」としてよりはむしろ「日系人」に軸足を置く生活戦略をとっていたとも言うことができるだろう。

フランシスコはその後、カリャオで日本漁船の乗組員相手の通訳をしている時に日本への出稼ぎを決意しているが、彼の場合には、単純労働者不足に悩む日本側の思惑に反して、日系人の日本語運用力が低く、職場や社会で様々な問題が生じていたため、彼のような人物が必要になっていたという状況が存在していたためであった。従って、日本に移ってからも、他の出稼ぎ日系人とは異なり、通訳として労働者の管理職的な位置でより恵まれた賃銀を得ることができたのである。通訳としての仕事は肉体的にはもちろん、時間的にも比較的余裕があったため、ワンカヨ時代の幼なじみで、当時在日ペルー大使を勤めていたビクトル・アリトミの依頼を受け、領事館業務の代行や在日ペルー人のための様々な手続きの援助、協力のための組織として「ペルーアシカガ協会」を設立し、その初代会長に就くことにもなったのである。

日常生活にまつわる様々なトラブル、交通事故、病気、犯罪などなどで援助活動を行う中で、日系以外のペルー人はもちろん、付近に居住するラテンアメリカ諸国から出稼ぎで日本にやってきた人々が彼らに援助を求めて集まってきた。フランシスコとその妻アリシアは、これらの出稼ぎ、あるいはオーバーステイの人々と日本人とを繋ぐ存在として自分たちを規定してゆくことになった。「ペルー足利協会」は、市民の行事に積極的に参加し、ペルー料理の出店や、民俗舞踏、音楽などのパフォーマンスにより足利市民との交流と相互理解の場を提供しようと努めた。もっとも、こういったボランティアレベルでの活動は、出稼ぎの恒常化・定住化、エスニックメディアの充実とデジタル環境の進展による情報の流布、地域の NGO、NPO、行政側の対応などなどによって徐々にそれらに吸収される形となり、フランシスコの高齢化もあってペルー足利協会は数年で事実上解散となっている。

日本に出稼ぎに来ていたワンカヨ出身者の交流組織も、フランシスコとビクトル・アリトミを中心に計画され、一度は集会も持たれたが、流動性の高い三世や四世の若年層が中心の出稼ぎ世代をまとめようとする試みは、足利在住者、ワンカヨ出身者どちらのスケールにおいても成功することはなかった。比較的年齢も日本語能力も高い少数の二世層が中心になって進めようと試みた足利在住ペルー人や日本在住ワンカイーノといった新しいネットワーク形成の試みは、数の上で出稼ぎ日系人の中心を占め、フランシスコたちとは社会的・文化的資源を異にする三世や四世の若い世代にとって、生活戦略の上での具体的な有効性を見出すことができず、結局実を結ぶことはなかったのである。

４．アイデンティティ生成と「地域」

日系ペルー人二世の生活と移動、そしてその結果として新しい環境における生活戦略や関係性構築のプロセスを時間の流れに沿って再構成してきたが、移動によって新しい環境に置かれた時に、彼はそこでの生活を築いてゆくためにそれまでに蓄積されてきた様々な社会的・文化的資源の中から利用できるものを選択し、動員している。知人もなくペルーに単独で渡航して来た一人の日本人移民が築きあげたものを自らのものとしながらも、日系二世として生を受けたフランシスコは、ワンカヨ・リマ・足利と移動を重ねてゆくなかで、日本人、ペルー人、日系ペルー人といったアイデンティティに重ねるように、静岡県人、ワンカイーノ（「ワンカヨっこ」）、チャラコ（「カリャオっこ」）、在日ペルー人、在日ラティーノ、足利市民などなどの「地域」が埋め込まれた社会的・文化的資源をその時その時の状況に合わせて動員し、同時にそれ以外のものを見えなく／見なくすることによって、アイデンティティ生成を繰り返し、それら相互間のコンフリクトを重ねつつ、自己の生活戦略を再決定し納得し受け容れていったと言えるだろう。

ここまで「地域」と括弧つきで表記してきたのは、移動する主体を中心に見た場合、その主体の心理的・内面的な地域：生活戦略に依拠しつつ人が自己の存在を規定しようとする時に参照される地域、と呼べるような存在であると考えられるからである。古典的なプッシュ・プル理論や社会階層論で扱われてきたような、地理的・外在的な地域が「環境」という位置で外から人間とその行動を規定するのに対して、ここでの「地域」は移動する主体が動員したり選択したりすることにより、結果的に内側からその主体を規定してゆくことにもなるもの、という言い換えができるのかも知れない。

繰り返しになるが、人はそれぞれの生活を通じて蓄積された社会的・文化的資源をもとに、次の生活戦略に見合ったものを動員、駆使して移動にともなう新たな環境での関係性を構築してゆくわけであるが、そこで意識するしないにかかわらず主体により選択される「地域」は、新たな環境における生活戦略上有効なスケールのものが動員されてくる点もここで確認しておきたい。リマ首都圏で生活している限りでは、静岡県というスケールで成立し得た互助的な関係性が、地方都市ワンカヨでは成立せず、日本人全体を結集する必要があった例はそのことを示唆しているだろう。もっとも、だからと言って、人は全く自由にそれらの資源を動員できるわけではない。人がストックしている社会的・文化的資源は常に有限であるし、なによりも現実に生活を営んでいる地域が環境として様々な制約を加えており、そういった条件の中で何等かの意味で機能すると判断されない限り選択されないからである。ペルー足利協会や在日ワンカイーノの会が結実してゆくことがなかったことは、その一つの具体的な事例として見ることが可能であろう。

また、これまで見てきたように、移動する主体によって選択される「地域」は、現実に存在する地域とは実質的な関係を持たない場合が少なくないのであるが、それにも拘わらず、いやむしろそれだからこそ、動員選択された「地域」はそれに依拠するアイデンティティ生成にと

もない内面から主体を規定してゆくものとなってゆく可能性が担保されてゆくとも考えられる。逆説的ではあるが、たとえ戦略的にであれひとたび動員されれば、その「地域」は実在するものでないだけに、主体への規定性を排除することが極めて困難なものとなってゆくということである。

今回は直接触れることができなかったが、三世や四世についても、また同じ二世であっても、移動の時期や期間、目的・動機によってその生活戦略や「地域」に依拠するアイデンティティ生成のあり方は様々である。また、ここでは移動を専ら地理的な次元に限定して報告して来たが、これを社会的な次元にもそのまま敷衍して考えてゆくことができるだろう（柳田未刊）。

地理的な移動にせよ、社会的な移動にせよ、彼らが自分自身のあり方・生き方を模索するなかで、それまで自分たちの中で蓄積されてきた様々な社会的・文化的資源を選択し動員し、同時にそれ以外のものを見えづらくしてゆくことで、自らの生活戦略を積み重ね、自己実現をめざし自分自身の社会での役割を築きあげ、納得し、受け容れようと努めてきたことであり、そこに往々にして現実に存在する地域とは異なった、社会的・文化的資源としての「地域」が組み込まれ機能してゆくということである。

【註】

1）この家族については、異なった視角から他の構成員も含め既に報告しているので併せて参照していただきたい（柳田 2007，近刊）。なお、柳田近刊は、大阪大学グローバル COE プログラム国際シンポジューム「移動とアイデンティティ」の「移動とアイデンティティをめぐる総合的研究をめざして」セッション（2008 年 8 月 25 日）での口頭報告に加筆修正を加えたものである。

2）森岡商会扱い第四回契約移民 203 名は 1 月 5 日に横浜を出航し、2 月 8 日にカリャオに到着している。うち静岡県人 84 名は最大の集団であったが、弥太郎は文字通り単独渡航だったようで、近隣からは三島町から一名の同航者が見られるだけである。このことは後の静岡県人のネットワーク形成を考える上で留意すべき点であろう。また、後にカリャオでの生活を通じて同県人の中でも極めて親密な関係を持つことになる庵原郡飯田村（現静岡市清水区）出身の杉山金作もこの時同じ船でペルーに到着し、同じ耕地で就労している。杉山は耕地を出ると国境を越えてチリに移動していったが、二人は後にカリャオで再会し親交を深めることになる。なお、同時に明治植民合資会社扱いの移住者 249 人もペルーへ渡航している。

3）カリャオで弥太郎が経営していた「浜村商店」は、1924 年末に資本金 43,000 ソル、売上高 113,000 ソルと記されており、資本金ではカリャオ在住日本人の中で第一位、売上高は二位であった。その後も事業を拡張し 1931 年には資本金 50,000 ソル、売上高 130,000 ソルを記録していたが、カリャオ在住日本人実業者中での彼の相対的な位置は徐々に低下しつつあった。

4）1936 年末現在で弥太郎・彦一の資本金はそれぞれ 6,000 ソル・50,000 ソル、売上高は 20,000 ソル・150,000 ソルと記録されているが、1939 年の調査にはその名前を見ることができない。

5）大正 2（1913）年 6 月末現在における職業調査では、ペルー全土の在留邦人数 5381 人のうち 461 人が理髪・髪結職として登録されている。大正 11（1922）年の調査では、6512 人の本業者が居住しておりそのうち 768 人が理髪・髪結として記録されている。（外務省 1913,1922）

6）昭和 5（1930）年のペルーにおける在留邦人調査によれば、ペルー全土で 20,385 人が「日本人」として確認されている。そのうちリマ市に 8,204 人、カリャオに 1,990 人、ワンカヨ在留邦人は 236 人であった。また、1935 年頃の本業者数は 113 で、広島 12，熊本 11，福岡・広島各 10、山形・佐賀・山口各 9、静岡・山梨 7 という順になっている。なお、日本国内の国勢調査に合わせて実施された「在外本邦人国勢調査」の公式報告書にはペルー全土の邦人数 20,535 人、うちリマ市に 8,220 人、カリャオ市に 1,986 人と記録されており、若干の違いが見られる。（外務省 1931a，1931b）

【文献】

Altamirano,T., 1992, *Exodo - Peruanos en el exterior*, Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.

_____, 1996, *Migración, El fenómeno de siglo*, Fondo Editorial de la Ponticifia Universidad Católica del Perú.

_____, 2000, *Liderazgo y organizaciones de peruanos en el exterior*, Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.

Del Castillo, A., 1999, *Los Peruanos en Japón*, Gendai Kikakushitsu Publishers.

Fukumoto, M., 1997, *Hacia un nuevo sol - Japoneses y sus descendientes en el Perú*, Asociacion Peruano Japonesa del Perú.

Morimoto, A., 1979, *Los inmigrantes japoneses en el Perú*, Taller de Estudios Andinos.

_____, 1999, *Los japoneses y sus descendientes en el Perú*, Fondo Editorial del Congreso de la República del Perú

Sakuda, A., 1999, *El futuro era el Perú - Cien años o más de inmigración japonesa*, ESICOS.

Watkins, M., 1999, E*l fin del sueño? Latinoamericanos en Japón*, Luna Books.

外務省通商局編，1913,『海外各地在留本邦人職業別表　大正 2 年 6 月末現在』

_____，1922,『海外各地在留本邦人職業別人口表　大正 11 年 6 月末現在』

_____，1925,『在外本邦実業者調　大正 13 年 12 月末現在』

_____，1927,『在外本邦実業者調　昭和元年 12 月末現在』

_____，1929,『在外本邦実業者調　昭和 3 年 12 月末現在』

_____，1931a,『在外本邦人国勢調査報告　昭和 5 年』

_____，1931b,『在外本邦人国勢調査職業別人口表　昭和 5 年』

_____，1932,『在外本邦実業者調　昭和 6 年 12 月末現在』

_____，1936,『在外本邦実業者調　昭和 10 年 12 月末現在』

_____，1937,『在外本邦実業者調　昭和 11 年 12 月末現在』
_____，1938,『在外本邦実業者調　昭和 12 年 12 月末現在』
_____，1940,『在外本邦実業者調　昭和 14 年 12 月末現在』
濱村悦男編，1995,『夫から妻へ　父から子らへ』私家版.
市川幸男編，1998,『アンデスをめざした親族の歴史』市川家親族歴史編纂会.
伊藤力，1974,『在ペルー邦人 75 年の歩み』ペルー新報社（リマ）.
増田義郎他，1999,『ペルー 太平洋とアンデスの国―近代史と日系社会』中央公論新社.
櫻井進，1935,『在秘同胞年鑑』日本社（リマ）.
_____，1940,『移殖民の樂土』日本社（リマ）.
柳田利夫編，1997,『リマの日系人―ペルーにおける日系社会の多角的分析』明石書店.
_____他，1999,『ペルー日系人の 20 世紀』芙蓉書房出版.
_____，2005,「二世の恋」柴田陽弘編『恋の研究』pp.237-258，慶應義塾大学出版会.
_____，2007,「日系ペルー人家族の一五年の軌跡から」山本岩夫他編『南北アメリカの日系文化』pp.234-254，人文書院.
_____，近刊,「在日日系ペルー人の生活とアイデンティティ・コンフリクト」（大阪大学グローバル COE プログラム国際シンポジューム「移動とアイデンティティ」報告集）.

【史料】

「昭和八年 身分関係届（婚姻届・離婚届・養子縁組届・養子離縁届）」在リマ日本国総領事館所蔵文書（国立国会図書館架蔵マイクロフィルムによる）
「暴動被害申告書」在リマ日本国総領事館所蔵文書（国立国会図書館架蔵マイクロフィルムによる）
「移民取扱人ヲ経由セル海外渡航者名簿　第二十七巻甲ノ二」外務省外交史料館 3.8.2.38
「移民名簿 第一号」日本人ペルー移民史料館（リマ）
「有富八郎文書」（国立国会図書館旧特別資料室架蔵）
「ワンカヨ日本人会文書」（慶應義塾大学柳田研究室架蔵）

（やなぎだ　としお　慶應義塾大学文学部）